

地域資源「竹灯籠」で挑む地域づくり

美郷町公民館連絡協議会

1 美郷町公民館連絡協議会の概要

当町の公民館は、遠隔地にある地域住民に対して、その行政手続の利便性を向上するための窓口を兼ねる交流センターが4箇所設置されている。そして、生涯学習の拠点のみを目的とした1公民館と併せて5箇所に公民館が設置されている。現在、5箇所の公民館が連絡協議会を設置して、あらゆる生涯学習の活動について協議し連携して活動している。

2 事業の概要

(1) はじめに

①実証事業名 地域資源「竹灯籠」で挑む地域づくり

②実証事業のテーマ

「地域資源を観光イベントに」をテーマに竹灯籠のイベントを実施。

③実証事業のねらい

近年は、少子・高齢化により急速に人口減少が進み、その加速度が年々増してきている。そして、空き家も増えていきいきとした生活空間が失われつつある。こうした状況を払拭するためには、地域住民が一体となって活力と希望の持てる地域づくりを推進する必要がある。そのため、荒廃化が進行する竹林を有効活用したイベントを地域住民総ぐるみで実施し、地域力の向上と観光イベント化を図る取り組みを行う。

(2) 具体的な取組（内容、活動状況等）

①小学5年生の体験学習

ア 大和小学校「長期宿泊体験学習」により、竹灯籠のろうそく作りを行った。

イ 竹林に出向き、竹の伐採、加工と竹の性質等を学習した。

ウ 宿泊場所に竹灯籠を設置して、地域住民よりいち早く竹灯籠の幻想的な光を体感した。

ろうそく作り



森林組合の職員さんに竹の性質や伐採の仕方を学んだ。

竹灯籠の体験



パラフィロウを砕き、やかんに入れて溶かして、空カプセルに流し込んで、芯を入れて固める作業をみんなで行った。



竹灯籠を設置して、昼に作ったろうそくを筒に入れて、その夜に灯して、幻想的な光を楽しんだ。

②地域の女性による 2,000 個のろうそく作り

秋の例大祭に設置する竹灯籠の筒に入れるろうそく作りを地域の体育館で一斉に実施した。これには、地域の婦人の方が携わり 2,000 個のろうそく作りに従事した。

体験学習で小学生が行った作業と同様に 2,000 個のろうそく作りは、手際よくスムーズ



24人の女性により砕く、溶かす、そして、流し入れてろうそくの芯を入れる作業が分担して行われた。

ズに行われ午前中で作業を終えた。

③竹の伐採と加工

いよいよ竹灯籠を飾る本番も近づく各地で竹が伐採され、竹灯籠づくりが行われた。

各4地域の連合自治会を母体にして、地域ごとに500本の作成を目標に竹の伐採と竹の斜め切りを行う作業が実施された。

その結果、2,000本以上の竹灯籠の加工が行われ設置されることとなった。

竹の伐採風景と竹の加工風景・・・この作業が各地域で行われた。



④竹灯籠による光のイベント

ア インドネシアの伝統的打楽器（リンディック）との共演

インドネシアバリ島に伝わる伝統的打楽器（リンディック）という竹の打楽器と竹灯籠を組み合わせ竹による音と光の共演によるコンサートを10月11日（土）に開催した。これには、地域の青壮年が中心となり、秋の例大祭の1週間前に竹灯籠本番のプレイベントとして500本を設置して行った。

音と光の共演

初めてのことで準備も大変

談笑しながらちょっと休憩



竹灯籠の幻想的な光

イ 夜神楽と幻想的な竹灯籠 2,000 本による光のイベント

秋の例大祭（10月18日）本番に向けて、地域住民の手で一斉に作業が行われ、2,000本の竹灯籠が、神社の境内周辺に設置され本番を待つのみとなった。

そして、当日は心配していた天気にも恵まれて、手製のろうそくを浮かべた 2,000本が、参道、境内に明かりを灯した。この何人もの人が携わった竹灯籠のやわらかな光は、秋の例大祭の奉納神楽のバックを華やかなものに写し、町内外から訪れた多くの人を楽しませた。



子どもからお年寄りまでが携わった、夜神楽と幻想的な光のショーは多くの観客を堪能させた。

ウ 先進地の視察（大分県竹田市）

多くの皆さんに共感を得た今回のイベントを来年はもっとより良いものにするため、関係者13名で11月15日に片道7時間をかけて大分県竹田市の「竹楽」と呼ばれる竹灯籠 20,000本のイベントの視察に出かけた。その催しのスケールと多彩なオブジェは、来年に向けて大変参考となった。



通りは竹灯籠で敷き詰め、公園はオブジェで彩られ、参道の階段は夜空の星のごとく竹灯籠で埋め尽くす。

3 事業の成果と課題

① 成果

このはびこる竹を地域資源として活用した初めての取り組みは、多くの地域住民を巻き込んで実施することが出来た。実証事業のテーマである「地域資源を観光イベントに」という目的の第一歩は順調にスタートを切った。

はびこる竹を切り出すことは大変な労力が必要であり、作業は想像以上の苦労があったようであるが、竹灯籠のやわらかな光を見た瞬間その苦労は報われたという感想を関係者からいただいた。

そして、町内外の多くの方からの反響もありイベントの継続を望む意見が多く聞かれた。また、秋祭りに久しく出展のなかった露天商の出店が並ぶうれしい風景が見られた。

さらに、年末の除夜の鐘の舞台装置に使用するアイデアまで出され、竹灯籠が再び3箇所のお寺で行く年・来る年を知らせる除夜の鐘とともに辺りを照らし出した。

こうして住民手作りのイベントは、その他のイベントにも利用される波及効果もあり

一定の成果を挙げることができた。

②課 題

イ 町外からの集客の拡大

はびこる竹の伐採は重労働であり、もっともっと青壮年の力が必要とされる。そして、作業が重労働であるがゆえにイベントのPRをもっと町外に発信し、大きな観光イベントに成長させる必要がある。

そのためには、次のステップアップとして半径 100km 程度までのポスターの設置やチラシの配布をベースとした町外に向けての商業に力を注ぐ必要がある。

ロ 竹の加工の工夫による作業の軽減

2,000 本以上の竹灯籠を飾るには相当の労力を必要とするため、労力の軽減を図る必要がある。切った生の竹はそのまま利用すると切り口や内面が汚くなり 1 年のみの使用で終わる。これが 3 年程度の使用が可能になると伐採の労力はかなり軽減される。そのため、竹を「燻竹化」し、使用寿命を長くする必要がある。

ハ 加工した竹の再利用

今年使用した竹灯籠はその一部を「竹炭」に加工して、その利用価値を高めた。しかし、使用した竹の全部を「竹炭」にするとすると相当の時間と労力が必要となる。

そのため、ウッドチップー等でチップ化し有機堆肥としての利用を考える必要がある。

4 今後の方向性

「地域力」を高めるため新しい発想のもとに取り組んだこのイベントは、相当数の地域住民の方の作業が毎年欠かせない。そのため、2 年目に向けてイベントの主旨を底辺まで浸透させ理解を求める必要がある。

それが、イベントの継続と発展性のカギを握る部分であり、連合自治会の役員と意見を深め、更なる底辺への浸透を図り、イベントの発展と拡大に努たい。

また、課題の部分で触れたように竹の使用後の利用価値を追求する取り組みを行い、はびこる竹の終末処理として、最近各地で行われている循環型サービスに真似て、肥料化への取り組みに発展させたい。